

料館の担当となりました。それまでの私は「信綱先生は石薬師の人で、万葉集の研究をされた偉い人だ」この程度の知識しかなく、関心を持ったこともなかったのです。それだけに正直いって辛いものがありました。

「雲の上の人」、「遠く世界の人」と考えていた信綱先生を、少しづつ知るにつけ、あの巨人・偉人・大学者といわれる人も私たちと同じように、いや、偉大な業績ゆえの孤独、そして挫折と苦悩の数々。歌に隠された感情のゆらめきに触れるほどに、親しみを感じるようになりました。特に最晩年の生命の燃焼とでもいべき歌・学問へのこだわり、その生きざまは、まさに『ひろく、ふかく、おのがじしに』に言いつくされている。——私にも、そのことが少しづつ分かってきました。

今、その職を去るにあたって私は、鈴鹿市民の皆さんがもっとこの郷土の生んだ先達のことを知ってほしい、誇りにしてほしいという思いでいっぱいです。関係者の皆様、ありがとうございます。

(鈴鹿郡関町立関中学校 教頭)

編集机から ◇古い話で恐縮であるが、昨年十月八日(日)「佐佐木信綱と鈴鹿」と題した「真珠の小箱」なる番組が放送された。こちらでは、5chのCBC TVの放送であったが、東はTBS TVで、西はMBS TVのネットに乗っ

て放送されたので、思わぬところ——千葉・東京・鎌倉また大阪・広島の知人から——手紙や電話をいただき改めてテレビの威力？を知った。関係者によると、三十年以上も続いている長寿番組で固定ファンも多く、視聴率は2%とか。計算では60万人ほどの人が見ていることになる。ビデオテープが館にあるので、ご希望の方はどうぞ人間というものは、同じようなことを考えるものなのか、あるいは偶然なのか。平成八年の月刊誌4・5月号に「佐佐木信綱資料館」の紹介記事が三誌に掲載された。解釈(解釈学念)・短歌(角川書店)・月刊国語教育(東京法令出版)で、ある一誌は、東京から編集長自身がカメラを持っての取材。また他の誌は近辺の高校の先生が来館されての探訪記事で4ページにわたり、また石薬師周辺の風物もカラー写真で紹介され楽しい記事になっている。ここまで書いて、ふと、卯の花<sup>1</sup>の見頃に焦点を当てたのかなと、編集者の顔が浮かんだ。

◇平成三年六月二十日の創刊号以来、年二回程度の発行を続けてきた小誌も、ここに10号を迎えることになり、さらに巻頭を佐佐木由幾先生の玉稿で飾ることのできたことは、この上ない喜びである。担当の者として何より嬉しい。

(辻 正)

※おわびと訂正 前号で山中智恵子先生のお名前を刊恵子と誤記し、大変ご迷惑をおかけしました。訂正し、おわびいたします。



目次	
二つのことば	佐佐木 由幾
展示室だより	辻 正
信綱一首	村田 邦夫
ひとつの出会い	田城 正廣
編集机から	正

・鈴鹿市教育委員会文化財保護課 (TEL・〇五九二・八二・九〇三二)  
 ・千五二二 鈴鹿市神戸九一・一一一五  
 ・佐佐木信綱資料館  
 (TEL・〇五九二・七四・三二四〇)  
 千五二二 鈴鹿市石薬師町一七〇七



二つのことば 佐佐木 由幾

佐佐木家の人に私になった頃、本郷西片町に在ったその家は寂しい家であった。家そのものも古い日本家屋であったし、住む人も老人ばかりであった。父、佐佐木信綱は六十六歳、母と母の母親と、お手伝いの人々であった。昼間は来客も多く、父の仕事を手伝って下さる方々も見え、左程でもなかったが、夜はさびしくて、賑かな家庭で育った私は本当に泣きたい程であった。

が決して冷たい家庭ではなかった。父母も祖母も理性の人であるよりはむしろ情の人とでもいべきか、言葉も軟かく、雰囲気もあたたかであった。父は何かというときよく「どうですか」と声をかける。たとえば朝、会ったとき私が「お早うございます」と挨拶する。と父は「ああ、お早う。どうですか」と言う。

廊下を通りつつ父は、障子の開いている部屋に私がいると立ち止り「どうですか」という。「元氣ですか」「何處かへ行くのですか」「何をしていますのですか」「どんな様子でしたか」「勉強はすすんでいますか」等等、その場その場でいろいろな意味を持つ便利なことばを「どうですか」と悟るまでには少少時が必要であったが、やがて父が「どうですか」というと「お陰さまで」とか「幸綱も今朝は熱が下り元氣になりました」とか「もう治綱は出かけました」とか、いろいろと具体的な返事をした。

私も何時の間にか年を取り、父の晩年の齢に近くなつた。今、わが家にも多くの「心の花」の会員の方が折折にたずねて下さる。そんな時、若し私が「よくいらつしやいました。どうですか」と言ったらどうだろうか。とになるか。「どう」とゆつくりやや低めに「ですか」と柔かく少しづつ高めになるように……。相手は一瞬何事かと私を見つめ、途端に笑い出すに違いない。おだやかな伊勢訛とでもいうような父の話し振りと声が無ければ

佐佐木由幾先生略年譜

一九一四年十一月十日、大連市現、中華人民共和国東北区に化学者鈴木庸生氏、文氏の次女として誕生。二三年帰国し、東京に住む。三二年、桜蔭高女を卒業、三五年、東京女子大高等部を中退。三七年、佐佐木治綱氏と結婚した。翌年、幸綱氏が誕生。五九年、治綱氏急逝 行年五一歳。翌年「心の花」主宰となる。七四年より八八年まで朝日カルチャーセンター短歌講座講師を勤める。

一九八九年、第一歌集『半窓の淡月』、九五年『一茎の草』を出版。現住所 東京都世田谷区玉川四三七一〇

※「佐佐木由幾論」 玉井慶子 短歌新聞社刊より

この「どうですか」は生きてこないのである。又、私は怠け者である。昔は木曜、土曜日が、お稽古日と私達は言い慣わしていたが、多くの方が詠草を持って見えた。その前後が私にとっては厄日であった。父は「どうですか」という言葉に続けて「歌は出来ましたか」「歌をお作りなさいまし」と何とも言えない穏かたでやさしい調子で言いかける。聞きつつ、何か、歌を詠み出さなければいけないような、神様に申し訳が無いような、そんな気持ちにさせられてしまうのであった。

思えば「どうですか」「歌をお作りなさいまし」とこの二つのことばに励まされ、支えられてきた私の半生とも言えるかも知れない。忘れられない言葉である。

信綱一首・10

此の石や 一日ひととせ百年を  
 溪の流れのなかに立ちゐる

(山と水と)

昭和二六年(一九五二)刊の最終歌集。敗戦以来いまだ七年、激動混乱の世に処して酷しく自己を凝視するひとの感懐である。江流ルレドモ石転ゼズ(杜甫)。明治初年に生まれて九十有二の天寿を全うせられた信綱先生も、大正初期に生まれて今なお清澄の歌境を深めつつ、歌誌「心の花」百年の歴史を護持せれる由幾先生も、共に、おのがじしなる「石」である。(村田邦夫)

展示室だより

「歌集を作るとは思ってもみいなかた。人様の歌集を拝見するのは割に好きであるが、自分のは、はつきり言って作りたくなかつた。…」第一歌集『半窓の淡月』の「あとがき」冒頭の言葉である。

「半窓の淡月」平成元年五月二十四日発行 短歌新聞社

●わが為に父が彫りたる蔵書印「半窓の淡月」かたぶきかかる

「あとがき」の後半を次に引用しておく。「父は化学者であったが篆刻が趣味で、私達それぞれに印を彫ってくれた。幼い時から私達は、本は勿論、ノート、千代紙、



二冊の歌集

人形の着物等にそれを押し、自己主張の一つの手段としてゐた。「半窓の淡月」の表はず景は大好きである。その言葉を見ただけで、宵の、或は暁の淡い月影、そしてその景とか雰囲気とかに触発されて浮ぶ多くの思ひをあたためてゐる窓際の私。ひとときぼっとしてしまふのである。

●父 夫 子三代の生に添へし手にやはく小さき孫の手を取る

●窓の外はひとしと闇なり言ひ難き書きがたきもの湧く胸をもつ

『一茎の草』一九九五年三月三日発行 雁書館

巻末「この世の逢いを」の中で筆者は「新婚当時の佐佐木家の静かなさびしい雰囲気堪えがたく、何ともさびしくて『林町の家へ行きたい』と言って治綱を困らせた。」と。続いて、その頃の里方の祖父の家では恒例となっていたクリスマス・イブの華やかで賑やかな情景を対照的にえがいているのを見ると、失礼な言い方ではあるが、いかにも新妻の生家への思い、とまどい、困惑といった心の揺れが伝わってくる。そして、人生の4/5以上を経た今、「もし短歌を知らなかったら、ただぼんやりと

生きて死にゆくであろう私が、短歌のおかげで、見えてきたものが何か一つでもこの集の中にあれば望外の仕合せである。」というくだりに接したとき、何とも言われぬ安堵感が私の胸をよぎっていった。おわりに私の心をとらえた作品の中からいくつかを次に掲げた。

●川風に烈しくゆるる青草原ひかりにまぶれ我も一茎の草

●煩惱のさまも三つ四つ身に知りて傷つくなかりし卑怯と言はむ

●冬の雨しきりに降り再び逢へざる人を思ひて眠る

●二つ三つころしびるる相聞の歌もちたかり生きし証しに

●その袖に覆はれあるを悟らずて父を卑怯と蔑したりしか

●息の妻に息は譲りたり独りなれば自由なれば時に涙のながる

(文化財保護課 辻 正)

卯の花の里だより

ひとつの出会い

田城 正 廣

この春の人事異動により、私は教育委員会から関中学校に転任することになりました。二年前の四月、隣のスポーツ課から文化財保護課に配属され、佐佐木信綱資